

地域は舞台 全隠岐牛突き連合会（島根県隠岐の島町）

文〓阿川尚之 写真〓鈴木勝

# 牛とかつぱと 男たちの島

島根県隠岐郡

隠岐の島町への旅

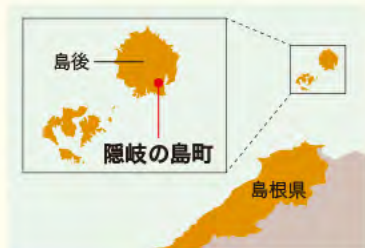
## 全隠岐牛突き連合会

後鳥羽上皇を慰めるために始まったと伝わる「牛突き」は、かつては農耕用の牛を使い、島前・島後の全島で庶民の娯楽として楽しまれていた。農業の機械化により役牛が姿を消した後、「牛突き」のためだけに牛を飼う牛主たちが伝統を守ってきたが、現在では島後の3地区にしか残っていない。

こうした中、1973年、3つの地区の保存会を束ねる形で「全隠岐牛突き連合会」が発足。記録映像の制作や年3回の大会開催のほか、観光闘牛や全国の闘牛開催地に呼びかけて全国闘牛サミットを開催するなど、保存継承と活性化に尽力している。2016年度サントリー地域文化賞受賞。



東郷集会所での前夜祭は牛突き関係者や“ひいき”と呼ばれる応援者たちで大賑わい。しかし、前夜祭を行う牛主は近年減りつつあるという。



自分は隠岐へ行くことに決心した。(中略)  
その海岸は(中略)  
西洋人の眼に未だ嘗て触れなかつたのである。

●小泉八雲『日本の面影』

### 隠岐島へ

八月最後の日の午後、鳥取県境港を出港した隠岐汽船所属の「フェリーしらしま」は約二時間後に隠岐群島の南端に迫り、最初の海峡に入った。隠岐群島は、人の住む大きな島四つと一八〇ほどの小さな島の総称である。そのうち、本土に近い三つの島と

周辺の小島をまとめて島前とうぜん、その北東に位置する大きな島と周辺のいくつかの小島を島後とうご、と呼ぶ。「しらしま」は島前の島々を抜けて、島後の西郷港へ接岸した。

今回島後へやってきたのは、翌日開催される牛突きの大会を見学するためである。隠岐島では古来牛と牛を闘わせて観覧する伝統がある。牛相撲とも呼ぶ。隠岐の伝承によれば、承久の乱(一二二一年)で敗れてこの島へ流された後鳥羽上皇を慰めるために始まった。いまでも大会が年に三回行われる。そのなかでも九月一日に行われる八朔の大会が有名だ。

一休みしたあと、東郷地区へ向かう。この地区の吉田家(屋号は山田屋)の牛「一番星」が、昨年の八朔大会で優勝した。大会前夜の集まりがあると聞いて、寄せてもらうことになった。東郷地区の集会場の二階では、すで



門脇浩輔さん。  
116-117頁中央で頭取として闘いの行方を見守っている。

に宴もたけなわであった。大広間に男たちが大勢座り、談笑しながら酒を酌み交わし、いかの刺身やらとりの唐揚げやらを口に運ぶ。男臭い熱気に充ちる。そのうち、我々に気づいて話しかけてくれたのが、全隠岐牛突き連合会の門脇浩輔さんである。牛突きでは「頭取」、すなわち行司をつとめる。高校のクラスメート一三〇人のうち島に残った六人の一人で、島への愛情は深い。島の伝統を大切に思い、残したいと思う。牛突きだけでなく、古典相撲の伝承にも関わっている。人口減少をいかに食い止め、島の豊かな伝統をどうや



八朔大会が行われる佐山牛突き場。八朔大会は島の東西に分かれて勝敗を決する場として古くから最も重要視されている。

があつた。牛の土俵入り、子供たちの踊り、会長の挨拶があつて、取り組みが始まる。

隠岐では人の相撲も牛の相撲も、座元と寄方に分かれて行われる。座元は大会の主催者であり、今回は都万牛突き保存会がつとめる。全部で六番ある取り組みごとに、座元、寄方、それぞれ牛を、綱取りが手綱を引いて入場する。綱取りは隠岐の牛突きの特色で、後鳥羽上皇に牛突きを見せるとき方が一にも上皇に怪我をさせてはいけないという。牛の角を合わせ、声をかけて闘志をかきたて、取り組んだまま動かなくなつた牛同士を一旦離すなど、重要な役割を担う。

双方の牛は入場し互いに向き合うと、頭を低く下げ、角を相手の牛に直角に向けて攻撃を開始する。角がぶつかるにぶい音が響く。綱取りは「ほい



吉田和宏さん。牛突き以上に盛んな古典相撲で大関を張るのは大きな名誉。

って伝えていくか。門脇さんは熱っぽく語る。

門脇さんは時々立ち上がり、相撲甚句を歌って自慢の喉を披露する。「相撲はよー 神世に始まりましてよー 今じゃよー 日本の国技となりてよー」。周りの人が手拍子をうち、「ぎたざい、こらさい」と間の手を入れる。一人歌い終わると、別の人が立ち上がって歌う。

門脇さんは、横綱「一番星1号」の牛主である吉田和宏さんを紹介してく

れた。古典相撲で番外大関を張つたという、堂々とした体躯の青年だ。牛を飼つた経験はなかつたのだが、牛主が減つていると聞いて急に思い立ち、五年ほど前初めて牛を譲り受けた。工夫して育てた二頭目の牛が、昨年見事横綱になつた。吉田さんの弟も二頭牛を飼っている。

その他にも親戚やら友人やら、いろいろ紹介された。みんなよく飲み、よく食べ、よく歌う。その間、女性たちは階下で用意した食べ物や飲み物を、せつせと二階の大広間に運んでふるまう。門脇さんのお嬢さん、妹さん、その娘さんたち。みなべつびんである。

### 牛突きの午後

翌日は吉田家で出陣式に立ち会つたあと、八朔大会の会場、佐山牛突き場へ向かつた。杉の木が立ち並ぶ山の斜



地元の都万保育所の子どもたちが踊る「牛突き音頭」。

面に囲まれた窪地の底の、丸い平面。埜で囲つたこの土俵で、これから牛突きが行われる。空気がひんやりしていて、木や土の湿つた香りが立ちのぼる。頭上にはぽつかりと空が開いている。

午後一時、拡声器で大会開始の案内

ほいほい」「ほら取った」「よいさー」などと声をかけ、牛が動くとそれに合わせて走る。手綱を低く、あるいは高く握り、さらに声をかけてけしかけ、引いてと、忙しい。牛と綱取りから少し離れたところに、緑色の法被をつけた二人の頭取が立ち、牛の動きに合わせて位置を変えながら、取り組みの帰趨を見守る。勝負が長引くと頭取同士が相談して、「引き分け」を宣告する。

出場した十二頭の牛は、最も軽い牛が三五〇キロ、最も重い牛は千キロもある。年少で軽量の牛は、綱取りも若い。二番目の取り組みに出た寄方東郷山田屋の「一番星2号」(三五〇キロ)は、昨晩会った門脇さんの甥の高校生がつとめた。三番目の取り組みに出た座元「若昇力」(四二〇キロ)の綱取りは、小学五年生の男の子。デビュー戦だという。懸命に駆け回って牛を制御しようとするものの、牛の首にまぎつ

いた綱を一瞬失い、周りの大人たちに取り返してもらう。

対照的に四番目の取り組みは座元「都万嵐1号」九三〇キロ、寄方は五箇の「仁王2号」千キロと、巨体同士の対決である。二頭の牛が頭を低く下げ、体中の筋肉を使って角をぶつけ合い懸命に押し合う。しかし、力が拮抗しているためか、綱取りが牛の体を押しながら、「ふんばちよいよ、追いこんだぞ、ほりやほりや」と声をかけても、動きが止まったまま十分が経過。頭取二人が引き分けを宣告したものの、今度は興奮がさめない二頭が組み合ったまま動きまわり、十人ほどの男たちが総出でようやく引き離れた。

五番目の大きな牛同士の取り組みも引き分けで終わったあと、最後の取り組みは座元が「怒虎為勝」四歳七五〇キロ、寄方が昨年「一番星1号」同じく四歳七三〇キロ。年齢も体格も



八期大会に出場するのは、隠岐生まれ隠岐育ちの黒毛和牛に限られている。

ほぼ互角な二頭の牛が争う。会場は興奮に包まれ、みな固唾を呑んで待つ。実は最初の五番は数少ない牛に負け癖をつけないため、すべて引き分けにす

ることが予め決まっている。勝敗をけるのは横綱同士の戦いだけである。綱取りが二頭の牛を向かい合わせ、その二頭が頭を下げ角をぶつけあつて、取り組みが始まった。さあどちらが勝つか。ところがどうしたことだろう。ぶつかり合うとすぐに、「一番星1号」がものすごい迫力で「怒虎為勝」をぐいぐいと押しはじめ、しばらくこらえていた「怒虎為勝」はたまらなくなつて、角を外すと後ろを向いて逃げ出した。

喜んだ山田屋の男たちが土俵にどっとかけこみ、次々に「一番星1号」の背中に飛び乗る。一人、二人、なんと四人が背中にまたがって、勝ちどきを上げる。飛び乗ろうとして落ちるのがある。今度誰かが、子供を乗せる。最後に牛主の吉田さんがまたがり、手を大きく上げて勝利を誇った。



吉田家の前夜祭で出会った若き綱取りたち。牛を知り尽くし、しかも敏捷さと体力が要求されるため、小学生のうちから練習に励む。

## 牛突き夜の夜

牛突き最後の取り組みが終わり、興奮が少し鎮まったところ、我々は都万の共同牛舎へ向かった。都万は昔から牛突



勝利を喜ぶ山田家の人たちとひいきの人たち。

きが盛んなところであり、都万牛突き保存会会長、全隠岐牛突き連合会副会長の齋藤博さんが本拠を置いている。共同飼育所は、海岸に近い開けた土地にある。三々五々、牛が大会から戻ってくる。雲一つないよい天気、湿度もなく、太陽の光を浴びて気持ちがいい。海からかすかに風が吹いてくる。

ほどなく、齋藤さんが赤いトラックに「怒虎為勝」ともう一頭を載せて、飼育場に戻った。トラックから二頭を降ろし、牛房に入れる。鼻輪をつけかえ手綱を外し、水をやり、餌をやり、一時も手を休めない。「怒虎為勝」は「一番星1号」に完敗したが、齋藤さんは淡々としている。ただ、ぼつりと「こんなに闘志に欠けるんじゃない、お前もこれからどうするかなあ」と言った。「怒虎為勝」はしばらくしたら売られて牛肉になってしまいうらしい。牛はし



怒虎為勝を連れて帰ってきた齋藤博さん。

かし表情を変えず、よだれをたらしながらもぐもぐと餌を反芻し、悲しいような寂しいような不思議な眼でこちらを見ていた。齋藤さんは、こどものとき牛突きを

見てすっかり魅了され、それ以来のめりこんだ。その齋藤さんにとって一番心配なのは、牛突きを支える牛の数が減少しつづけていることだ。かつて牛は農耕作業に欠かせないもので、この家も牛を飼っていた。六〇年代以降、農作業の機械化が進むにつれ、牛突き



齋藤さんが飼う牛は、代々、「怒虎為勝」と名づけられた。

大会出場だけを目的に牛を購入し飼育する牛主が伝統を支えてきたものの、牛の飼育には金がかかる。大会に出そうと思えば、古いしきたりで人をもてなし、酒をふるまい、さらに散財せねばならない。そんなこんなで牛主が減り、牛が減る。「町から牛主に補助金がいくらか出ているが、それでは足りない。農水省に陳情して特別立法をお願いしているものの、なかなか法律制定に至らない」と、悩みはつきない。その夜都万での直会では静かに酒が酌み交わされ、東郷での直会では夜がふけても若いエネルギーが全開のままであった。

## 島との別れ

翌日は隠岐最後の日。朝食のあと、駆け足で島内を観光して回った。最初は海から川を遡り、幻のかっぱを探す



西郷湾と八尾川を巡る遊覧船は1日3回運航。湾内の自然景観と川岸に広がる島の暮らしを展望できる。

「八尾川周遊かっぱ遊覧船」。ガイドさんによれば、湾が深い西郷は、江戸時代、北前船がしばしば寄港し、海が荒れたときには鎮まるのを待つ風待ちの港として栄えたのだそうだ。宿屋がいくつもあって各地の人が泊まり、住みつく人も多かった。古くは貴人が流さ



国指定重要文化財の億岐家住宅(右手奥)と宝物殿。  
今も億岐家の方々が住んでいる。

天皇の孫)の子孫だと伝えられる。  
律令時代、億岐氏は国司をつとめた。  
隠岐は一つの国だった。その後大名や幕府の領地となったが、慶應三年、王政復古の大号令が発せられると、隠岐の人々は松江藩の郡代を島から追放

し、一時的に独立を達成する。隠岐は国である、ただの離島ではないという意識は、今でも島の人たちのあいだに残っているのかもしれない。

日本各地の多くの町や村と同様、そしてこれまで訪れた島と同じように、隠岐も人口の減少や高齢化に悩んでいる。牛突きをはじめ、古い伝統や豊かな文化を将来誰がになうのか、心配だ。けれども隠岐には何か特別なものがある。島の荒々しい地形とどこかで共通する、大地と直接つながっているようなエネルギーを秘めている。東郷山田屋の人たちと「一番星1号」の闘いぶりを見ただけで、そんな結論を出すのは早いかもしれないけれども、そう信じたと思うた。



必勝を願い、ひいきの人たちが牛主に幟を寄贈する。山田屋の幟は最も数が多かった。

明治二五年に隠岐を訪れた小泉八雲は、船で帰途につき、遠ざかる島に思いを馳せた。残念ながら私は空から帰る。旅客機は海を見下す高台に伸びる滑走路のはしまで進んでエンジンの回転数を一気に上げ、すぐに離陸した。振り向いて探したけれども、島の姿はすでに消え、隠岐の三日間はまるで夢を見ていたかのようだった。  
(あがわなおゆき・法学者、エッセイスト)



かっぱの棲処があったとされるかっぱ淵。今でも、心のきれいな人にはかっぱが見えるという。



前夜祭と直会のお手伝いをする女性。  
双子の赤ちゃんのおでこには名前を書いた絆創膏が。

れてきた。隠岐の方言が出雲や伯耆の言葉と多少異なるのも、多様な文化があるのも、そしてべつびんさんが多いのも、そのせいだろう。  
もう一カ所は玉若酢命神社。隠岐の総社であり、建物が重要文化財に指定されていて、いかにも神さびている。代々神主をつとめる億岐氏は、祭神の玉若酢命(日本武尊の父である景行